

王朝歌人と陸奥守

はじめに

河原左大臣と通称される嵯峨天皇の皇子で一世の源氏となった源融(八三〇-八七〇)は、鴨川沿いに位置する別業河原院に松島湾内にある塩釜の海浜景を模した広大な庭園を造作したことで知られ、それをさらに賞賛する歌を翁となった在原業平が詠する『伊勢物語』八十一段の構成は両者の政治的負性の感傷とも相俟って、和歌に陸奥の地名を採り入れることが夙くから「みやび」を基調とする風雅の道を極める方法のひとつとなったといえよう。また伝説に彩られる陸奥幻想の礎が、『伊勢物語』二十五段に於いて生成され得るのも、『古今集』(卷十三、恋三)に於いてたまたま連接したかのような業平歌「秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさりける」(622)と小野小町歌「みるめなきわが身をうらとしらねばや離れなで海人の足たゆく来る」(623)が、近世の新注『古意』や『打聴』などが拾い挙げた妄説となる業平・小町夫婦伝承の形象化を促すとともに、東下りの昔男が陸奥にまで足を延ばしたことで、百十五段の「むかし陸奥の国にて、男女すみけり」の、この女の詠歌「おきのゐて身を焼くよりも悲しきはみやこしまべの別れなりけり」(104)までが『古今集』卷十の墨滅

歌に掲げる小町歌であったことに拠る『伊勢物語』の構造化を促し、陸奥幻想の実態をまさに浮き彫りにしている。

このような業平・小町夫婦伝承が、風雅の道に色好み性を重視する遍昭と小町との『大和物語』百六十八段「苔の衣」の贈答歌の例もあって、各々が六歌仙同士の親密な交友関係を構築する作意的所産であったにしても、鎌倉初期成立ではないかと言われている「小野氏系図」(群書類従)では小町は小野篁の孫で出羽守良真の娘となっているが、他の史料に現われない良真との年齢差からしても小町は篁の娘であった方が穏当なのだが、その篁は『公卿補任』『古今和歌集目録』に拠っても、承和九年(八四〇)正月十一日に陸奥守に任ぜられている。これはおそらく遥任なのだろうが、小町の祖父峯守までも陸奥守に関わるとなれば、小町の陸奥在在を想定しても火のない所に煙は立たないの類で、昔男業平との夫婦伝承もそれなりの信憑性で担保されているのだといえよう。

さらに陸奥守となる父と娘との関係で言えば、『勅撰作者部類』にも「右大将道綱母」に「陸奥守藤原倫寧女」とある如く、『蜻蛉日記』作者の父倫寧が陸奥守であった。それも兼家との結婚当初のことで、倫寧の赴任は天曆八年(九五五)十月であった。道綱母への不安を残す旅立ちで、行く

久下 裕利

末長い夫婦の絆を願う父倫寧の疑念に対する娘婿兼家の答歌は「われをのみ頼むといへばゆくすゑの松の契りも来てこそは見め」（蜻蛉日記作中歌）とあって、これは陸奥にある歌枕「末の松山」を採り入れた『古今集』歌「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（巻二十、東歌・陸奥歌¹⁰⁹³）を踏んでいて、浮気心なくいつまでも変らぬ夫婦の契りを誓ったものだったのだが、結局は兼家の儀礼的な返歌の域を出なかった。

既にいくつかの例を挙げての緒言となったが、『伊勢物語』初冠段での河原左大臣源融の詠「陸奥のしのぶもぢぢり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなくに」（古今集、巻十四、恋四⁷²⁴）の掲出の意図も荒廃した河原院を知る作者紀貫之が改めて陸奥への関心を惹起させたに違いないが、またその後著名な王朝歌人が陸奥守となって赴任したことで、京から遠く離れた幻想的な陸奥国の歌枕を親近性のある確かな歌枕として定着させ、和歌世界に豊穡な表現性をもたらしていくことになったのだろう。

本稿では平安前期から源信明、中期から藤原実方、後期から橘為仲を取り上げてその実態を確認していくことにする。

一 陸奥守源信明と中務

醍醐天皇の寵臣源公忠の息が信明（^{九〇〇}）で、父子ともに公任の『三十六人撰』に選ばれる王朝の代表的歌人である。そして信明は、『古今集』時代の傑出した女流歌人伊勢と敦慶親王との娘中務と結ばれている。周知の如くこの母娘ともに同じく三十六歌仙である。

このような高貴な血脈と華やかな交友関係が想定される信明なのだが、京官としてよりは地方官としての生活が主体であったらしく、若狭守、備後守、信濃守、越後守を歴任し、晩年の応和元年（^{九六六}）十月十三日には

陸奥守に任ぜられたのである（^{三十六人歌仙伝}）。その当時信明は五十二歳で、五十歳ほどの中務と夫婦であったようだが、信明の陸奥赴任に際して、中務は夫と同行したのか、それとも京に留まったのか定かでない。

稲賀敬二は『玉葉集』（旅、¹¹⁷⁰）「待ちつらむ都の人に逢坂の関まで来ぬと告げややらまし」の詞書に「源信明朝臣、陸奥守にてまかりけるにともなひて、任果てて上り侍るとて、逢坂の関にて詠」んだ、中務の歌だとするの『玉葉集』の誤解だとする。^{注(2)}その理由は『大鏡』（道長下、雑々物語）の叙述が、「任果てて上京した信明が都の中務へ送った歌というたてまえで書かれていると解すべきもの」と理會するからだだが、繁樹の後妻への「詠みたまひけむ歌は覚ゆや」の発問は、中務歌への関心に由来するから、稲賀氏の曲解かもしれない。また平野由紀子も夫信明にもなつての中務の陸奥下向は認め難いとする。^{注(3)}中務の居所はともかく、信明が確かに陸奥守として赴任したのは、次の『信明集』歌で知られる。

堀河の大臣の、宮の権大夫ときこえし時、陸奥より聞こゆる

明け暮れは籬の島を眺めつつ都恋しき音をのみぞ泣く（¹³⁹）

堀河大臣とは藤原師輔の次男兼通のことで、天徳四年（^{九六〇}）正月二十四日以来、村上天皇中宮安子の「宮の権大夫」の任にあった。歌中「籬の島」は陸奥国の歌枕であり、塩釜の浦にある島で、朝に夕に眺めては、都が恋しくて声を立てて泣いてばかりいるというのである。なお『信明集』には屏風歌が数多く採録されるが、例えば「村上御時名所屏風」にはその名所絵に付した信明歌に「安積の沼」「勿来の関」「浮島」などの陸奥の歌枕が散見する。

また、中務との恋の成就に困難を極めた四十三首の贈答歌群を経て、よ

うやく中務のもとに通い始めた頃の贈答歌に次のようなものがある。

近付きて、男

闇夜良し風も涼しく吹くころは心ことにて待たじとやする(94)

又

波高く松のかかれる世にやあらんたのみて幾そ度か越すてふ(95)

かへし

末の山昔よりまつ君をおきて波高くとも越さじとぞ思ふ(96)

「かへし」とあるのが中務歌ということになるが、例の『古今集』歌「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ」(前掲)を踏まえた贈答歌である。「末の松山」を波が越える疑心を訴えるのが女の立場と思いがちだが、信明と中務の場合も信明の不安を中務が払拭しようと思っている。というのも『古今集』歌も心変りしないと女が誓う詠であり、『百人一首』の清原元輔歌「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」も『後拾遺集』(巻十四、恋四七〇)の詞書に「心変り侍りける女に、人に代りて」とある如く、女の心変りを恨んでいる。和歌世界に於いては恋愛で不実なのは多くの場合男ではなく、女の方なのである。

正保版本系『信明集』が中務との恋の始まりから終焉までをその贈答歌群で構成する信明の一途な恋の物語化が顕著である一方、『中務集』では平野氏が指摘するように、中務の贈答の相手は元長親王、常明親王、平かねき、藤原実頼、師輔、師氏、師尹などと多く、華やかな異性関係が記され、信明はそのうちの一人にすぎなかったのである。このような多情な男関係をもつ中務と実直そうな信明との夫婦関係が成立したのも奇妙だが、それをもって陸奥同行の反証の根拠とするには充分とは言えないだろう。

なぜなら信明が陸奥在任中の京に残る中務へ送る歌が存在しないからである。中務の方にこそ鄙びた陸奥から都に帰る期待感が昂まっていたことであらう。

因に宮内庁書陵部本『歌仙傳』^(注5)には信明の代表歌二首が掲載されるが、

その二首とも中務との恋愛関係に於いて贈歌された「あたら夜の月とはなとおなじくはあはれしれらん人にみせばや」(原文カタカナ)「こひしさはおなじ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや」であって、陸奥守として現地に赴任したにも拘らず、『信明集』には屏風歌以外、陸奥の歌枕を詠み込む作例にとぼしいのである。

二 陸奥守藤原実方と清少納言

藤原実方は天徳四年(九一〇)の誕生と推定され、左大臣師尹の孫で、父は定時だが、幼少にして父を亡くし、叔父大納言済時の養子となった。勅撰集入集六十四首で、中古三十六歌仙のひとりである。その実方が陸奥守に任せられた事情は、『古事談』『十訓抄』『源平盛衰記』『百人一首一夕話』等の挿話としてあまねく知られている。

それは殿上で実方が行成の冠を投げ捨てたという暴力事件で、一条天皇の「歌枕見て参れ」とする左遷による陸奥下向説話である。その真偽のほどは不明だが、一般には左遷としての認識に傾いている。夙に池田亀鑑は、実方と業平との共通項として、①武官として相似た経歴をたどり、極官が「中将」であること、②当代きっての「好き者」であったこと、③歌人として高い評価を得ていたこと、④陸奥にまで下ったこと、⑤後世著しく伝説化・説話化された人物であったこと、を挙げている。^(注6)さらには両者の行動性格上の放縦性などを加えることができるかもしれない。陸奥へ下る実

方に業平像を重ねた歌集の物語化や、あるいは事実を背景とする様々な潤色に加えて伝承説話自体の混同増殖が指摘されているが、逆（注⁷）に実方の陸奥下向が『伊勢物語』の虚構性を事実性に転換した作用もあったのかもしれない。

それにしても実方の陸奥下向が左遷というのは、『中古歌仙三十六人伝』に「長徳元年正月十三日、兼^{注⁸}陸奥守」（読点・傍点筆者）とあり、本官はあくまで左近衛中将であり、陸奥守はその兼任であったはずなのであり、『日本紀略』や『権記』の長徳元年（九五）九月二十七日条では赴任に際し、天皇に召され禄が下給され、正四位下に昇叙されている（赴任賞）。左遷とは考え難い（注⁹）。また東宮居貞親王（のちの三条天皇）女御である濟時女公子に第一皇子敦明親王が正暦五年（九五）に誕生（日本紀略、同年五月九日条）したばかりで、その上、養父左大将濟時も疫病により長徳元年（九五）に死去（日本紀略、同年四月二十四日条）する激動の時代に、左近中将を辞してあえて陸奥下向を実行するのは、いかにも世情に背を向けることではなかったか。

濟時夫妻が相次いで逝去したため重喪で延期していた折、花山院から近侍であった実方に饒別に弓を贈られたが、その『実方中将集』歌（337）の詞書に「下るべき日ののびければ、まことはいつばかりと仰せられて」とあり、いつまでも出立の日が決まらなるとするのは、誰もが実方の真意を付りかねていると見做せよう（注¹⁰）。次いでに陸奥赴任の際に別離の歌を交わした中に注目すべき陸奥国の歌枕の作例を指摘しておく（注¹¹）。

○みちのくに衣の関はたちぬれど／またあふさかはたのもしきかな（185）

○なにかは君にむつれて年をへば衣の関をおもひたたまし（191）

○別るとも衣の関のなかりせば袖濡れましや都ながらも（336）

一首目は女院詮子の女房侍従典侍との短連歌で、饒別の旅の衣を縁にして陸奥の歌枕「衣の関」を詠み入れたのに対し、逢坂の関で実方が切り返した詠。二首目は、出立の決意もにぶるといふ素直な実方詠。三首目は、どこぞの懇意にしていた女房詠だろうか、「関」に涙をせき止める「堰」を掛けて、都にいても涙で袖が濡れるという理知的な詠である。竹鼻『注釈』は「衣の関」を詠みこんだ歌は実方以前には『後撰集』に一首ある程度で、（略）歌枕として定着したのは実方以後である」とし、さらに一八五・三三六両歌に対して「衣の関」を歌に詠みこむ場合の新しい表現技法を試みた作」（四六四頁）と評価している。

論を元に戻すと、陸奥下向の原因ともなった行成との確執に関しても、たまたま同時期にあった蔵人頭の人事に弁官としても有能であった行成が親密な源俊賢の推挽を得て後任の頭に収まったことを、明暗を分けた二人の官人の岐路が対照的に誇張脚色された創作の可能性があり、実方の一方的な私怨でないにしても何らかの政治的背景による陸奥下向に違ひなからうが、まさかそれが清少納言との恋愛に関わることはなかったであろう。増淵勝一は、実方と清少納言との機縁に関して師貞親王（のちの花山天皇）東宮擁立の立役者が師尹・濟時父子であったことから実方も花山院の東宮時代から出入りし、花山院を取り巻く歌人グループの一員であった清少納言の父清原元輔や兄である戒秀法師との親交が築かれていったことを指摘している（注¹³）。

しかし、清少納言は花山院の乳母子であった橘則光とまず結ばれ（注¹⁴）、天元五年（九六二）に則長を産み、またその後元輔の旧友であった藤原棟世との間にも、小馬命婦を儲けている（注¹⁵）。つまり、実方との関係が最も親密となる可能性は、棟世との破局にあった間で、しかもそれが実方の長徳元年（九五）

の陸奥下向直前となり、清少納言にとっても人生を左右する重大事となっていたかもしれない時期なのであろう。そうすると実方との男女関係は、清少納言が正暦四年（913）冬と推定される中宮定子に出仕した以後ということなのだろうか。

三卷本『枕草子』七十八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」では「いもうとせう」と則光との親しい関係は公然としているのに対し、実方初出の三十三段「小白川といふ所は」では「兵衛佐」との官職名で、寛和元年（915）当時、実方は左近少将兼播磨権介（中古歌仙三十六人伝）であり、天元元年（917）任命の「兵衛佐」（右兵衛佐）と前官で呼んでいるのである。増淵氏は「清少納言が実方の名を知ったのが、その兵衛佐時代に始まったことを物語っているであろう」（二六九頁）とするが、「兵衛佐」と前官の呼称を用いて無関心を装うようで、『枕草子』には実方を好意的に描いているにしても、その男女関係を暗示するような記述はいっさいないところを見ると、もし二人に関係があったとしても隠しておくべき秘められた関係だったのではないかと思われる。ともかく、子をなした橘則光と藤原棟世との夫婦関係成立後、つまり清少納言が定子のもとに出仕した以降、それはおそらく棟世との別居中であり、急速に実方との関係が深まっていったはずなのである。そうした経緯を『拾遺集』『後拾遺集』『実方集』『清少納言集』によって辿ることが可能である。

(イ)『拾遺集』（卷十四、恋四）^{注(16)}

元輔が婿になりて朝に

時の間も心は空になる物をいかで過ぐしし昔なるらむ（850）

藤原実方朝臣

(ロ)『後拾遺集』（卷十二、恋二）^{注(17)}

清少納言、人に知らせで絶えぬ中にて侍りけるに、久しうおとづれ侍らざりければ、よそくにて物など言ひ侍けり、女さし寄りて、忘れにけりなど言ひ侍ればよめる

忘れずよまた忘れずよ瓦屋のしたたくけぶり下むせびつゝ（707）

『実方集』

元輔がむすめの、中宮にさぶらふを、おほかたにていとなつかしう語らひて、人には知らせず絶えぬ仲にてあるを、いかなるにか、久しうおとづれぬを、おほぞうにてものなどいふに、女さしよりて、忘れ給ひにけるよといふ。いらへはせで、立ちにけり、すなはち

忘れずよまた忘れずよかはらやの下焚く煙したむせびつゝ（181）

返し 清少納言

葦屋の下焚く煙つれなくて絶えざりけるもなによりてぞ（182）

『清少納言集』（流布本）^{注(18)}

宮のあまた殿におはします比、さねかたの中將まいり給て、おほかたに物などのたまふに、さしよりて、わすれたまひにけりなといへと、いらへもせてたちける、すなはちいひをくりたまへる

わすれすやまたわすれすよかはらやの下たく煙下むせびつゝ（10）

返し

しつのをは下たく煙つれなくてたえざりけるもなによりそも（11）

(ハ)『実方集』

忍びてもの言ひける人に、月のあかりける夜、まありけるを見て、かくなむ

出づと入ると天つ空なるこちしもの思はする秋の夜の月（330）

『清少納言集』^(注19)
(異本)

うちなる人の、ひとめつゝみて、うちにてはといひければ

さねかた

いつといるとあまつそらなる心ちしてものおもはするあきの月かな(31)

(二)『清少納言集』(異本)

さねかたのきみの、みちのくにへくたるに

ところもふちもせならぬなみた河そでのわたりはあらしとおもふ(33)

実方と清少納言との夫婦関係を積極的に認めようとする増淵氏に対して竹鼻氏は否定するが、その根拠となるのが、(イ)『拾遺集』「時の間の」歌の詞書と詠者名で、『拾遺集』の伝本による相異が不確定要因となっている。しかし、(ロ)『後拾遺集』『実方集』の詞書に共通して実方と清少納言の間柄を「人には知らせず絶えぬ仲」(後者)というのだから、二人の間には特別な男女関係が成立していたと考えられ、『枕草子』からは全く想定できない親密な交渉があったということが、これら歌集群によって明らかにするのである。しかも、この「絶えぬ仲」とは夫婦関係の成立をも意味することであれば、公表できない秘匿される夫婦関係とはいったいどういうことなのかを考えてみることも必要になろう。一夫多妻が許される時代であっても、出自の高い正妻の親元を気づかったり、また嫉妬深い正妻であれば、他の妾妻の存在を隠さざるを得ない場合もあったであろう。清少納言の方の事情なのか、それとも実方の方に汲み取るべき事情があったのか、定かではない。

ところが、「久しうおとづれぬ」状況に対して、よそよそしくつれない実方の対応を萩谷朴は「これではやはり、口先の巧みさはともかく、本心では清少納言を避けたがっている実方と、ただ只管に憧憬を抱いて、片想

いの残酷な真相に気づかぬお人好しの清少納言という、二人の奇妙な取り合わせが感得されるのではなからうか」(九六頁)^(注20)とする。事情があったにしても清少納言の方ではなく実方の方にあるらしいことは、実方の傍に近寄って「わすれたまひにけりな」と清少納言の方から詰問したり、(二)『清少納言集』の実方陸奥下向に際し、恋する女の心情を露わにして惜別の涙が絶えないとする告白に清少納言の方に真剣さが窺われようが、ここにも問題がなくもない。

というのは、「ところもふち」歌は『小大君集』に養父濟時の他界の折、「さねかたの君、おやにおくれてなげくときくころ」との詞書で、小大君の贈歌「そこはふち淵はせならぬ涙川袖のわたりはあらじとぞ思ふ」を利用した作詠で、「ところもふち」との本文を信じれば、「底」を「床」にして哀傷歌を恋歌に転化させた巧知があり、また「袖のわたり」が陸奥国の歌枕^(注21)である点も時機を得ていよう。

しかし、竹鼻氏は「この小大君の歌を清少納言が利用したとみるには、利用する側の論理はともかく、これを受け取った実方は不快な思いをしたにちがいない。まして親密な関係にあった小大君が傷心の実方を思って詠んだ歌を、こうした形で利用されることは堪えがたかったろう。はたして、このような無神経なことを清少納言がしたであろうか。この歌によって実方と清少納言の関係を論ずることはできないであろう」(五三四頁)と、清少納言歌として根本的に疑っているのであるが、氏も認めている通り実方の「忘れずよ」歌が長能の「わが心かはらむものかかはらやの下焚く煙わきかへりつつ」(長能集29)に依拠しているとすれば、「ところもふち」歌の意図も明確で、異本歌だからといってこれを退ければ、『枕草子』で培われた清少納言像が瓦解しかねないし、実方に一方的に翻弄されているばかり

のまさに遊戯的な恋愛状況が浮き彫りになっているという他はないだろう。しかし、「ところもふち」歌によって実方と清少納言との恋愛を歌人同士の対等な状況に引き据えているといえよう。筆者はむしろこうした恋愛状況よりもその期間の短さにこの恋愛の本質を見とどけたいと思う。

(ロ)の流布本『清少納言集』の「あまた殿」は「ま(満)」と「は(波)」の字形相似による本文転化で「あはた殿」と認められ、萩谷朴が考証したように、正暦五年(九四四)二月初旬、積善寺供養のため中宮定子が東三条院の東側二条北宮つまり「栗田殿」に滞在したところに詠まれたことになり、正暦五年(九四五)ごろ、実方と清少納言との間に交渉があったことは、竹鼻氏も否定し得ないのである。つまり、清少納言が出仕した正暦四年(九四三)冬以後、実方が陸奥に下向する長徳元年(九五〇)九月まで、正暦五年(九四四)でさえ「久しうおとづれぬ」期間があったのだから、実質の恋愛は一年そこそこの短期間であったということになる。イ)の「もの思はする秋の夜の月」と詠ずるのも長徳元年は重喪だから、正暦五年の秋と限定されよう。

清少納言が陸奥下向に伴うことがなかったにしても実方の妻子はどうであったのだろうか。正妻が同伴したことは『実方中将集』では建治本の独自歌と言われる「いにしへを」歌(221)の詞書に「みちの国にて北の方うせ給ひてのち、つづぎみに袴着せ給ふとて」とあって知られ、その上袴儀をした幼児の存在も確認される。童名「つつ君」とする幼児は、その誕生の七日夜の産養に中将道綱から贈られた祝歌に「知らずして七日ゆくまでなりにける数まさるなる浜の真砂を」(164)と記してあり、その幼児が陸奥下向以前の誕生であるとともに、「数まさるなる」との下句の内容から「つつ君」の他に既に兄か姉かがいたことになる。実方の子どもについて

は、「いにしへを」歌をも掲出する『重之集』に次のようにある。^{注22)}

みちのくにのかみはらぶの(子)と、をとこそんなど、かう
ぶりし、もきす、またこかまもきす、かはらけとれとあれば人
くかはらけとりて、はゞきみうせてのことなり

いろくにあまたちとせのみゆるかなこまつがはらにたづやゐるらん(147)

かへし かみ

いにしへを今日にあらするものならば一人はちよもおもはざらまし(148)

又 かへし

ひなごとに千よもゆづりてまなづるのいづれのくもとびかくれけむ(149)

詞書に「はらぶの(子)と」とあるように、実方には複数の妻と加冠(元服)、裳着、袴着を行なう年齢の男女複数の子どもがいたことになるが、亡くなった北の方の子が袴着をした最年少の「つつ君」だとしても、これら妻子の素性はいっさい不詳というほかない。

ただ『尊卑分脈』に実方の子として朝元・賢尋・貞叙・義賢の四名が挙げられている。しかも賢尋以下三名がいずれも僧籍に身を置くことになったのだから、その事情の一つとしてやはり嫉妬深い正妻の存在が考えられる。とにかくこの四名の中では「かうぶりし」の該当者は朝元だけということになる。竹鼻『注釈』は朝元の推定年齢が元服には若すぎるということで、朝元よりも年上の男子の存在を想定し、その男子が左大将朝光の娘の子であろうと推定している(五三三頁)。

出自の高い左大将朝光の娘が実方の正妻とするのが最も自然だが、天理図書館蔵藤原定家筆本『実方集』の独自歌(19)の詞書に「大将の御むすめをかたらふを、許されずいはるるを、子さへいできにけるを、……」と

あり、実方は結婚を許されないのに子までできてしまったという。閑院左大将朝光（五二～五五）は、実方が枇杷第で済時の義母延光室（藤原敦忠女）

に養育されていたが、延光没後、若い朝光が通ってきて後妻にしたというのである（大鏡、兼家伝）。朝光には『尊卑分脈』に花山院女御や円融院女御となった二女が知られるが、実方の正妻を朝光の別の娘とも特定できない。ただ増淵氏は朝元の「朝」は祖父朝光の一字をもらっての命名だとする（九七頁）。朝元は『尊卑分脈』に「従四下 陸奥守」とあって、父実方と同じような運命を辿ることになる。^{注(23)}

ところで、実方の陸奥下向に帯同したのは妻子ばかりではなく、三十六歌仙に名を連ねる清和源氏の源重之（五三？～〇〇？）もその集「みづのうへ」歌（94）の詞書に「さねかたの君のともみちのくにくくだるに、……」とあって、同行したことが知られる。重之は実父兼信が陸奥に土着していたからで、伯父兼忠の猶子となつての京での官人生活に見切りをつけたことによる。^{注(24)} その理由に実方の養父右大将済時に主従契約のしるしとなる名簿を呈して臣従していたが、その済時の死と中関白家の没落によって前途を断たれたことを指摘するのは目崎徳衛である。^{注(25)} 重之の場合は、その生活基盤が既に陸奥にもあったことで、実方の陸奥下向の決意とは重ならぬいが、逆に重之からの勧誘と説得があったのかもしれない。実方にとっての陸奥守補任事情と、左近中将を辞しての陸奥下向決定とは異なる背景が考えられてもかまわないような気がする。実方は長徳四年（九六）十二月に赴任先で卒するが、重之も『三十六人歌仙伝』に「長保年中於陸奥国「卒」とあり、実方より少し長生きをしたが、ともに二人の著名歌人が陸奥国で没している。

三 陸奥守橋為仲と四条宮主殿

積極的に自己を押し出すには愚直さゆえに空回りしているような印象を抱かせ、多少軽佻浮薄な性向の持ち主ともいえるが、^{注(27)} 個性豊かな歌人として橋為仲（二五？～二八）を挙げ得よう。名門橋氏の平安時代の中興は一条天皇の乳母となった徳子だが、概して男たちは受領層に甘んじている。その受領層の中で和歌に志を持つ特異な風流集団である和歌六人党と通称される頼通の異性猶子となつた源師房を庇護者とするグループがあり、藤原範永、平棟仲、源頼家、源頼実、藤原経衡、橋義清、源兼長（重成）らを挙げるのが一般的だが、長久五年（二四）頼実が早逝し、また義清の肥後守赴任によって弟の為仲が和歌六人党を構成するメンバーとして浮上し、「永承六人党」とも言える時期があつたようだ。^{注(28)}

高重氏が後冷泉朝歌壇に於ける永承・天喜年間の六人党の姿を活写しているとも言つて為仲の家集に『橋為仲朝臣集』があり、また四条宮寛子に仕える下野との親交がうかがえる『四条宮下野集』などによって、為仲の広範に及ぶ交遊関係が知られることになる。とりわけ頼通の娘四条宮皇后寛子の女房たちとの交流は、為仲が天喜四年（〇五）四月三十日開催の皇后宮寛子歌合には皇后宮少進として右の念人に名を列ねているし、また康平三年（〇六）には皇后宮権大進であることが『定家朝臣記』（同年七月十七日条）に確認され、そして晩年には太皇太后宮亮（尊卑分脈、勅撰作者部類）となり、一貫して寛子に仕える皇后宮職の職員であつたからだろう。その為仲が陸奥守に任ぜられたのは白河朝の承保三年（二七）のことであつた（水左記、同年九月十二日条）。既に六十歳を超えていたと思われる。このような為仲の経歴や歌道に執っていた過程の詳細は犬養前掲論考に委ねて、

本稿では陸奥守赴任前後の動向に着目していこうと思う。

為仲と下野との間に特別な関係があったにしても治暦三、四年(二〇六、七)の頃には下野は師賢と親密であったようだし、為仲が越後守に赴任した延久元年(二〇六)春以後に下野は出家してしまっている。次に挙げるのは陸奥下向時の別離歌の主なものである。^{注(29)}

(イ) みちのくにのかみになりて、くだらむとし侍しに、式部大輔実

綱が七条のいづみにて、わかれをしみ侍しに

すぎゝたるころは人もわすれじなころものせきをたちかへるまで(18)

李部郎藤原実綱

ひとはいさわがよはすゑになりぬればまたあふさかをいかゞまつべき(19)

(ロ) 大宮の少将の内侍もとより

おもひいでんおもひわするなあさゆふにやまのはいづるつきつもととも(20)

返し

いはざらむさきも人をわすれめや月日にそひておもひこそいでめ(21)

(ハ) つきひをかぞへてこそは をはり

あづまぢのはるけきほどにゆきめぐりいつかとくべきしたひものせき(22)

(イ)の「ひとはいさ」歌は『金葉和歌集』(巻六、別部)にも採入され、^{注(30)}その詞書に「橘為仲朝臣陸奥へまかりくだりける時人人饒し侍りけるによめ

る」(346)とある実綱詠で、陸奥国の歌枕「衣の関」を詠み入れた為仲詠に対して、東国への出入口にあたる近江国の歌枕「逢坂の関」で応えた歌である。前掲実方の短連歌に既に作例があった。実綱は和歌六人党と交流のあった亡き資業の息で、七条の実綱邸で盛大な送別の宴が催されているから、為仲の人望が知られる。

次の(ロ)の大宮寛子に仕える「少将の内侍」は『四条宮下野集』にもその名が見え、為仲との男女関係を想定できなくもないが、儀礼的な惜別歌とみておきたい。ところが、(イ)の「をはり(尾張)」は少将の内侍と同僚女房の詠とはいえ、袴、裳の「下紐」との掛詞で、陸奥国の歌枕「下紐の関」^{注(31)}を詠み入れ、いったいいつまた「下紐」を解くことができるでしょうかとの意は、やはり男女関係にあったと考えるのが自然であろう。当「あづまぢの」歌は二、三句目に多少の字句の相違はあるものの、『詞花和歌集』(巻六、別)に「橘為仲朝臣みちのくにのかみにてくだりけるに、太皇太后宮の大盤所よりとてたれとはなくて」(184)とする詞書で採歌されている。為仲が寛子サロンの女房たちに慕われる存在であったことは確かである上、その中に特に情を交わした女房がいたことが考えられよう。

また、陸奥在任中に京へ送った歌に次のような詠がある。

八月十五夜、京をおもひいで、大宮女房の御なかに十首のうち

見し人もとふのうらかぜをとせぬにつれなくすめる秋のよの月(41)

当歌は『新古今和歌集』(巻十、羈旅歌)にも採入されて、詞書に「陸奥国に侍りける頃、八月十五日夜に、京を思ひ出でて、大宮の女房のもとにつかはしける」^{注(32)}とある。歌枕「十符(布)の浦」を詠み入れて「見し人」からの音信もなく寂しい心の内を吐露した恋歌の体だろうが、いずれにしても大宮寛子に仕える女房に宛てた歌で、それも『為仲集』の詞書に拠れば、女房に送った歌は十首あり、その中の一首だという。残りの九首が知られないが、大宮の女房たちの特定の誰彼を指して詠んだ歌でなかったとしたら、いかにも多い歌数で、忍ぶ恋の相手にはそれとなく知られる詠みぶりの歌を紛れ込ませてあったとも勘繰りたくなる。都人からの返しとし

て左衛門権佐行家や散位実清らの返歌が『為仲集』に記載されていても、なぜか女房たちからの返歌は一首も記録されていないのである。

そこで気になるのが『下野集』ではないもう一つの四条宮家の女房の家集『主殿集』に陸奥に赴任する男と主殿との恋歌が記載されていることである。以下煩瑣に互るが該当する十首を掲出する。^{注33)}

あきころとをくいくおとこ、はきにつけていひをくれる

うしろめたつくをゝるこそ秋はきにおもはぬかたの風もこそふけ(52)

返し

しめそむるもとあらぬこはきたはやすくゆくてのかせになひく物かは(53)

なを人のよもしらす、このたひはちかくてなといひて、おとこ

しのふくさいさやかたみにむすひてむうきよはたれもしらぬいのちを(54)

返し

むすひてもまたむすはてもしのふ草わすれかたみにおもはれよかし(55)

とほきほとにありける人に、たよりふみと人のこひはへりけれ

は、いひやる

山かせのたよりにつくることのはをいさあらしとやいはむすらむ(56)

みちのくにへいにける人を、いとしのひてくる人につとめてい

ひをこせる女

かくてのみあるめるうみもをなしなをなみこすいそのあらはれねかし(57)

返し

すゑおこすなみたになくはいまこそはねはあらはれめやせしまのまつ(58)

かくなんあるときゝて、ある人の御もとより、かれをはいかに

思なりぬるそとありければ

あたたみにたえすこさるゝみとなりておもひもかけすすゑのまつを(59)

秋ころ物いひそめて、とをくいにけるおとこの、九月はかりに

きくの花をふみの中にいれていひはへりける

ちよもとてむすひし事のはにさへやはなうつろはす露はをくらん(60)

返し

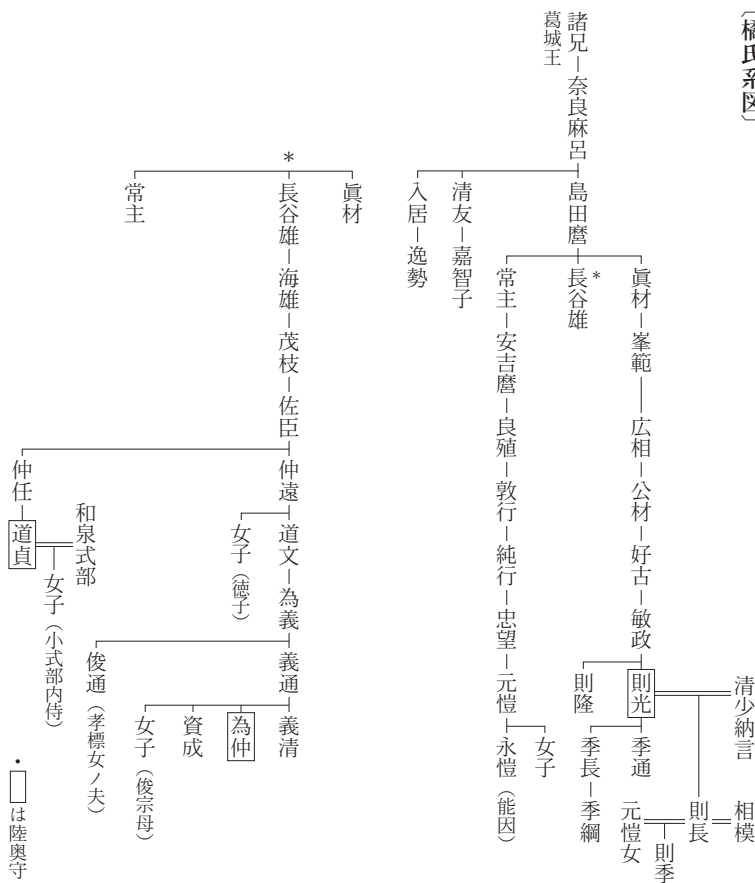
つゆむすひしもさへいまをくめれといろもかはらてまつそあやしき(61)

主殿は自己を「女」と三人称化して、「あきころとをくいく」男と誓った恋も新しい男の出現に心変りをして新しい男に身を委ねることになったとする展開で、これら十首が恋物語を志向してひと括りにまとめられているらしいことを看破したのは針本正行であった。^{注34)}この「あきころとをくいく」男は、(57)の詞書に「みちのくにへいにける人」とあって、旅立った遠国が陸奥国であったことが知られるのである。新しい男は陸奥国へ赴任した男の存在を知らながら求愛を続けたようである。その関係が陸奥国へ下向した男の親しい友人でもあるのか、「ある人」の耳にも入り詰問されるまでになったという経緯が、(57)(58)(59)に明かされている。そこに針本氏が指摘したように例の『古今集』歌「君をおきてあだし心わが持たば末の松山波も越えなむ」が引用されているのである。特に「ある人」への主殿の返歌となる「あだ波にたえず越さる身となりておもひもかけず末の松をば」は明示的で、「おもはぬかたの風」に靡きかねない不安を「萩」で表白し、「忍ぶ草」で堅く結びおいた男の恋も、あっけなく女の浮気心で無残な結末となっている。陸奥国の歌枕「末の松山」は、ここでもやはり女の心変りに利用されていた。

この『主殿集』の「みちのくにへいにける人」とは誰なのか、為仲と結びつける根拠は何一つ存在しないのだが、為仲の恋も京から遠く離れた陸奥国へ下ってしまったら、どんなに堅く契りおいても、頼りにならない約

束と同じで、信じて返歌を待つ意味すらないのだろう。末尾の二首もその総括としての趣で、「とをくいにけるおとこ」は前半の男と同一人物と見ておきたい。「秋ころ物いひそめて」ということであれば、陸奥下向直前に別れが忍び難くて始まった恋だったとも思われる。因に繰り返すが、為仲の補任は承保三年(二〇三)九月であったし、四条宮家の女房たちとの交渉やその歌人らしき官人が陸奥下向するという条件が重なる該当者は、そう多くはいないはずだ。大藏卿長房への返事に為仲は「しづむともいまはわが身はさもあらばあれこひしき人を見ぬぞかなしき」(50)と返歌して

〔橋氏系図〕



いる。

為仲は任国陸奥での生活を沈倫の日々と感じ、早く帰京したいと願って^(注35)いたにも拘らず、二年の延任を願い出、結局永保三年(二〇三)まで陸奥国にとどまることとなった。^(注36)上京に際し、宮城野の萩を長櫃十二合に入れて持ち還ったと鴨長明『無名抄』に記され、都大路の見ものであったという。時に為仲は七十歳に近く、いまだ意気軒昂であったようだ。為仲の後任は源義家で後三年の役が始まること(奥州後三年記)になるが、既に永承六年(二〇五)には陸奥守となった源頼義により前九年の役が始まったこと(陸奥話記)からすれば、争乱の時代に「風流歌人受領」と言われる為仲が陸奥国守を務めたことの意義は別に考えなければならないかもしれない。

おわりに

橋氏に平安時代中期以降陸奥守となる者が多い傾向があり、それが陸奥国の歌枕形式に参与して、なお同時に則光の妻が清少納言であり、道貞の妻が和泉式部であったことの意義は、和歌史上にも宮廷女房歌人との間に多くの作例を残す結果となったと思われる。橋氏の相関図を考えるにあたり、前掲系図に加え勅撰和歌集から随意に拾い出して置く。

『後拾遺集』

橋則光、陸奥国に下り侍けるに、言ひつかはしける

中納言定頼

かりそめの別れと思へど白河のせきとゞめぬは涙なりけり(巻八、別47)

義通朝臣、十二月のころほひ、宇佐の使にまかりけるに、年明

けばかうぶり賜はらんことなど思ひて、餞賜ひけるに、かはら
けとりてよみ侍ける 橋則長

別れ路にたつ今日よりもかへるさをあはれ雲居に聞かむとすらん(巻八、別478)

橋則長、越しにてかくれにける頃、相模がもとにつかはしける

橋季通

思ひ出づや思ひ出づるに悲しきは別れながらの別れなりけり(巻十、哀傷560)

橋則長、父の陸奥守にて侍りける頃、馬に乗りてまかり過ぎけ

るを見侍て、男はさも知らざりければ、又の日つかはしける

相模

綱たえてはなれはてにしみちのくの尾駿の駒を昨日見しか(巻十六、雑二954)

人の、長門へいまなむ下るといひければよめる 能因法師

白波の立ちながらだに長門なる豊浦の里のとよられよかし(巻二十、雑六1216)

『金葉集』

みちのくにへまかりけるにあふさかの関よりみやこへつかはし

ける 橋則光朝臣

われ独いそぐと思ひし東路に垣根の梅はさきだちにけり(巻六、別離歌37)

『詞花集』

道貞にわすれられて後みちの国のかみにてくだりけるに

和泉式部

諸共にたゝまし物をみちのくの衣の関をよそにきくかな(巻六、別173)

陸奥守とその妻や愛人までもが文学史上に名を残す著名な歌人であり、もはや陸奥国は辺境の地、異界の地として時空の隔絶に窮するところではなく、周知のように能因こと橋永愷がそして西行、芭蕉へと陸奥の歌枕への憧憬を抑えきれず旅立っていく。和歌史上あるいは歌壇史としてその先達となる王朝歌人たちの活動が個々の宮為よりは父子継承であったり交友

関係の連関としてあったことの意義は大きいのである。

為仲詠は能因の歌作に影響を強く受けているし、和歌六人党に能因とともに影響を与えた相模(公資との離縁後、定子の遺児入道一品宮脩子内親王家の女房)は若い頃、則光息の則長と婚姻関係にあった。そしてその則長は、義通が叙爵前に宇佐の使として出立する治安三年(1033)十一月二十五日の送別の宴で「別れ路に」歌一首を献じている。さらに能因が長門国へ下る人に詠んだ「白波の」歌は、『能因集』の詞書には「則長朝臣、今なむ長門へ下るといひおこせたるに」とあり、三卷本『枕草子』奥書の「橋則季」の注に「母前長門守橋元愷女」とあるから、能因の姉妹と則長とが夫婦となっていた縁故による惜別歌だったといえよう。このように橋氏は同族意識で強固な結びつきを形成していることが掲出歌で窺い知られよう。

一方、竹鼻『実方集注釈』の解説に、源信明から平孝義まで陸奥守の一覧を掲げて、出自、官位の点から実方が陸奥守に任命されることの異例を言い、さらに「藤原済家・藤原貞仲は道長家の家司で橋道貞も道長の信任の厚かった人物であった。このように陸奥守に任命された人物は、実方を除くと、東国に本拠を置き、一族・伴類の武勲によって中央政府の信頼をえた人物と道長家の家司やそれに近い者たちであった」とも言うが、道長の後継者頼通からその弟教通時代の陸奥守橋為仲に關してもそのようなことが言えるのかどうか、竹鼻氏の視界にないだけにまた疑問の残るところである。

注

(1) 『三十六人歌仙伝』(群書類従)から源信明の項全文を掲げる(新字体に改めた)。

散位從四位下源朝臣信明。前右大弁
公忠男。

- 承平七年正月十六日補藏人。父公忠朝臣。辭五位藏人補之。八月三日任右衛門權少尉。同四月如旧為藏人。天慶二年二月任式部少丞。四年三月任大丞。五年三月廿九日叙從五位下。任若狹守。天曆元年二月任備後守。同二年正月十四日叙從五位上。治國。同年十二月十五日復任。同七年正月廿九日任信濃守。天德二年正月廿九日任越後守。同五年六月八日叙正五位下。応和元年十月十三日任陸奥守。安和元年十二月五日叙從四位下。治國。天祿元年卒。年六十
- (2) 稻賀敬二『女流歌人中務―歌で伝記を辿る―』(新典社、平成21年)
- (3) 平野由紀子『信明集注釈』(貴重本刊行会、平成15年)の解説。以下の引用も同書に拠る。なお、その解説に信明陸奥下向の証となる『玄々集』の源重之歌を挙げる。
- (4) 以下、陸奥国の歌枕には歌中傍線を付す。
- (5) 新藤協三『三十六歌仙叢考』(新典社、平成16年)に拠る。
- (6) 池田龜鑑『藤原実方論』(『短歌研究』昭和11年9月)
- (7) 高島康子「陸奥の実方―その伝説の原形と変貌―」(『國學院大学大学院紀要』7、昭和50年度)、岡嶋偉久子「実方説話について―実方後代資料の検討―」(『甲南国文』33、昭和61年3月)
- (8) 『中古歌仙三十六人伝』(群書類従)から藤原実方の項全文を掲げる(新字体に改めた)。
- 藤原実方。左大臣師伊公孫。侍從貞時男。母左大臣雅信公女。天祿三年正月廿四日任左近將監。故左大臣給
二合仕之四年正月七日叙從五位下。寂平
讓天延三年正月廿六日任侍從。天元元年二月二日任右兵衛權佐。五年正月七日叙從五位上。正月卅日兼備後介。永觀元年十一月廿日叙正五位下。宇佐使
勞二月一日任左近少將。寛和元年正月廿八日兼播磨權介。二年七月廿二日叙從四位下。少將
勞三年七月十六日任右馬頭。正曆二年九月廿一日任右近中將。四年正月七日叙從四位上。五年九月八日轉左

近中將。長徳元年正月十三日兼陸奥守。四年十二月卒。

- (9) 礪波美和子「歌人の旅―歌枕をめぐる―」(『院政期文化論集第三卷 時間と空間』森話社、平成15年)
- (10) 岸上慎二「藤原実方について―平安の一貴族として―」(『和歌文学研究』12、昭和36年9月)は、城子後宮の財的基盤造りのための積極的反抗の道を陸奥に求めている野心をもった東国下りであったかとするが、従い難い。
- (11) 引用は竹鼻績『実方集注釈』(貴重本刊行会、平成5年)に拠る。
- (12) 目崎徳衛『漂泊―日本思想史の底流―』(角川書店、昭和50年)「歌枕見テマイレ」・『百人一首の作者たち』(角川ソフィア文庫、平成17年)は「時めく近衛中将から辺境の国司へ、これは優遇とはいえないが、口論とか左遷とかいう事は信頼すべき史料にみえない。むしろひどく治安の乱れていた辺境を鎮定する使命を帯びて、つまり在地豪族に睨みの利く貴種なればこそ選ばれたものと、私は推定している」(引用は後者)とする。
- (13) 増淵勝一『平安朝文学成立の研究 韻文編』(国研出版、平成3年)「三 清少納言の生涯」
- (14) 三卷本系陽明文庫蔵『枕草子』の橘則季に関する勅物に拠れば「陸奥守則光孫」とある。則光が陸奥守であったことは『小右記』寛仁三年(1026)七月二十五日条に見える。
- (15) 早稲田大学蔵『後拾遺集』勅物(上野理『後拾遺集前後』笠間書院、昭和51年)に「小馬命婦―前撰津守藤原陳世朝臣女、母清少納言、上東門院女房、童名狛俗称小馬」とある。
- (16) 引用は新日本古典文学大系『拾遺和歌集』(岩波書店)。同書の脚注(二四五頁)の指摘にもある如く、異本第一系統の詞書には「中将元輔が婿になりての又の朝に 藤原信賢」とあり、これを信じれば、実方との結婚説に疑問符が打たれる。
- (17) 引用は新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』(岩波書店)
- (18) 流布本『清少納言集』は『私家集大成中古I』(明治書院)書陵部蔵「清少

- 納言Ⅰ(五〇一・二八五)」
- (19) 異本『清少納言集』は前掲『私家集大成中古Ⅰ』書陵部蔵「清少納言Ⅱ(五〇一・二八四)」
- (20) 萩谷朴『清少納言集全歌集 解釈と評論』(笠間書院、昭和61年)
- (21) 引用は平塚トシ子・松延市次・長野淳『小大君集全釈』(翰林書房、平成12年)。同書の「袖のわたり」の語釈に「宮城県名取郡にあった阿武隈川下流の渡船場」(二六九頁)とある。
- (22) 引用は目加田さくを『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈』(風間書房、昭和63年)に拠る。
- (23) 朝元は長元二年(二三九)正月廿四日任(群載第二六)で、長元四年(二四三)十月卒(尊卑分脈)である。なお『後拾遺集』卷十三、恋三七三番歌の詠者名に「皇太后宮陸奥」とあり、早稲田大学『後拾遺集』勸物に「陸奥守藤原朝光朝臣女」とあるのは「朝光」ではなく「朝元」の誤りであろう。
- (24) 『大和物語』百十九段に「閑院の大君」に「陸奥の国の守にて死にし藤原さねき」が懸想したことがみえる。「閑院の大君」は貞元親王の長女で基経女所生で兼忠と同母となろう。また『尊卑分脈』に兼忠の娘一人が記され、「右大将濟時室」と注されている。実方と重之との縁はそこに由来すると思われる。なお「藤原のさねき」が真材だとすれば陸奥守に任ぜられたことがないため、阿部俊子『校本大和物語とその研究』(三省堂、昭和29年)は、真興とし陸奥守であった期間が延喜十九年(九二五)頃から延長元年(九三三)頃となる。また閑院の大君と信明が関係があったかのような誤伝が『信明集』(歌仙家集本)に記載されている。
- (25) 『後拾遺集』(卷十七、雜三)に「小一条右大将に名簿たてまつるとよみて添へて侍ける 源重之ノみちのくの安達の真弓ひくやとて君にわが身をまかせつるかな」(976)とあるによって知られる。
- (26) 目崎徳衛『平安文化史論』(桜楓社、昭和43年)「源重之について―撰関制における一王孫の生活と意識―」
- (27) 犬養廉『平安和歌と日記』(笠間書院、平成16年)「第二篇第9章橋為仲とその集―古代末期の歌人像―」
- (28) 高重久美『和歌六人党とその時代―後朱雀朝歌会を軸として―』(和泉書院、平成17年)
- (29) 引用は好村友江・中嶋眞理子・目加田さくを『橋為仲朝臣集全釈』(風間書房、平成10年)尊経閣文庫蔵「乙本全釈」
- (30) 『金葉集』(二度本。但し二句目「わが身はすゑに」)『詞花集』(但し二・三句目「はるけきみちを行きかへり」)の引用は『新編国歌大観』(角川書店)に拠る。
- (31) 前掲『橋為仲朝臣集全釈』に「下紐の関は為仲集が初出か。陸奥国の歌枕。現在の福島県伊達郡国見町」(二五八頁)とある。
- (32) 引用は久保田淳『新古今和歌集全注釈三』(角川学芸出版、平成23年)に拠る。久保田氏は「後宮女房に言い送るといっても、懸想じみた要素はほとんどなく、もっぱら望郷の想いに駆られての行為であったのであろう」(三〇六頁)とするが、いかが。
- (33) 引用は前掲『私家集大成中古Ⅰ』に拠る。
- (34) 針本正行「平安女流日記の終焉―四条宮家の女房日記『主殿集』を素材として―」(『日本文学論究』55、平成8年3月)
- (35) 久保田『全注釈』に「いのりつゝなをこそたのめみちのおくにしづめたまふなうきしまのかみ」(37)等を挙げている。
- (36) 延任の理由について久保田『全注釈』に「帥記」に「彼国有亡弊声」とあるように、陸奥地方の、恐らくは冷害等に伴う疲弊の建て直しのためと考えられる」(二九〇頁)とある。
- (くげ ひろとし 日本語日本文学科)